

地方小出版
情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

小さい世界だが、確実に育ち 新しい「カルチャー」を切り開く

情報誌「ホテルジャンキーズ」の15年

文・村瀬 千文

とにかく遠かった…。15年前に初めて訪れた地方小さんまでの市ヶ谷駅からの道のりは。そして、先日、15年ぶりに再訪したところ、いつのまにか地下鉄の新線が通り、すっかり「駅から至便」のロケーションになっていた。が、しかし、ドアを開け、一步社内に入った瞬間、思わず笑い出しそうになってしまった。なんと、15年前とまったく同じ世界がそこにはあったのだ。まるでセピア色の映画のプレイバックシーンを観ているような、おかしきような、けれどなんだかうれしいような気分でもあった。

一方、こちらは短かった…。創刊15年、これまで発行してきた86冊を重ねてみると高さ40センチあまり。15年の間、晴れの日も嵐の日も雪の日も、来る日も来る日も雑誌作りを続けてきたわけだが、その記憶は思い起こせば一瞬の光のようなものだ。

ご存知ない方のためにご説明すると、当誌「ホテルジャンキーズ」はホテル愛好家のための生情報をテーマに1997年に創刊された、B5判、82ページのホテル情報誌である。全国の書店さんでも販売していただいているほか、会員組織のホテルジャンキーズクラブの会員、定期購読者の方々も読者として支えてくださっている。

ホテル利用者に対して本当に役立つ情報を提供するため、ホテルからの広告はお断りしている。内容はすべて「ホテル」と「旅」に関するもので、毎号さまざまな切り口での特集のほか、利用者サイドからのホテルレポートもある。

れば、ホテルサイドからの情報発信ページもあり、海外の各種ホテル情報ページもありで、ホテルにまつわる情報が多角的に読める万華鏡のような雑誌である。



今まで読者だった人々が「送り手」に

さて、昨今のメディアでは、「誰に対して」、「どういう人が」、「何を伝えるのか」、この3つの関係性がわからなくなってきているように思う。多くの雑誌は読者の姿を見失って迷走し、ウェブ媒体でも流行のブログはほとんど送り手の私情みたいになっているようである。

そういう状況のなかで、口はばったいようだが、ウチはメディアの原点に立って忠実にやれてきているのではないかと思う。

というのは、ウチの場合はまず第一点目の「誰に対して」という点が非常にはっきりしているからだ。受け手の

ターゲットとなっているのは、ホテルジャンキーと呼ばれるホテル愛好家、ホテルが好きなたちである。それも旅行代理店のパッケージツアーにそのままのって旅行に出かけるような受身の人々ではなく、自分でホテルを選び、手配し、個人旅行で旅を楽しむ人たちが多い。

次に、第二点目「どういう人が」という点だが、ここがウチの場合、従来のメディアと大きく違う点であろう。送り手となるレポートやコラムの執筆者たちが、受け手と同じなのである。

つまり、今まで読者だった人々が、同時に送り手になっている。その結果、送り手が受け手と同じ目線で情報発信しているのである。

最初の頃は、読者投稿以外のほとんどの記事を私が書いていたのだが、15年間の間に少しずつ書き手の人材が育ち、今では読者出身の方々の連載コラムが誌面のほとんどを占め、しかも長期に渡って続いている

連載も多く、それらのどれもが読者にも支持されてきている。

そして、第三点目の「何を伝えるのか」。当誌で特に人気のシリーズ「ホテル偵察記」や「島笠あき子の『食べる』ホテル日記」などは、ホテル利用者が実名で顔写真付きのプロフィールで身元を明らかにした上で、利用日も明記し、実際に身銭を切って体験したことをレポートしているもので、すべて実体験に基づく事実に基づいた記事である。昨今、ブログが大流行で、こうした利用者情報のようなものはブログでも読めるという意見もあるかもしれないが、ブログのほとんどは発信者が特定できない匿名情報であり、当誌の場合は実名である点が異なる。

当誌も15年の間には一時マスコミ

で派手に叩かれた時期もあるが、自慢のひとつは創刊来の読者も多く、長い間に渡って読み続けてきてくれている読者が非常にたくさんいることだ。小さいけれど、確実なマーケットがあって、さまざまな試練の中でずっと続いて残っている人もいる。そして、長く続ける中でこうした人々が、生半可な

プロのライターではかなわないほど力をつけ、パワーを発し、確実に育ってきている。読者アンケートを見ると、読者もその辺はしっかり見分けているようだ。

小さい世界だけれど、確実に育ってきているのを最近とみに感じている。地方小さんをはじめ書店の皆さんな

ど当誌を支えてきてくださった方々のご協力があってこそ、ここまで続けて来られたわけだが、出版界においては本当に「小さな松明」ではあるけれど、ひとつの新しい「カルチャー」をやれたのではないかと考えている。

(むらせ ちふみ / 「ホテルジャンキーズ」編集長)

新刊ダイジェスト

※価格は総額(税込)表示です。

『七つの蕾』 ●松田瓊子著



23歳で夭折した少女小説家・松田瓊子(マツダ ケイコ)。「銭形平次」の原作者で知られる野村胡堂の次女である著者の代表作が現代に甦った。昭和の初めの鎌倉を舞台に草場家の四人姉弟の百合子・梢・譲二・ナナと日高家の黎子・このみの姉妹と日高家に引き取られた靖彦、みんなで七人の十代の子どもたちが織りなす青春群像。四人姉弟はとても仲が良く、黎子の父の急死など悲

しい出来事があったとしても、友を愛し、思いやりの心を忘れない。大人になるにつれ失ってしまう子どもの純粋な空想力を思い出させてくれる。作中には彼らの作った詩や物語なども登場し、斬新な構成になっている。鎌倉の四季の移ろいも楽しみ、古き良き時代が描かれている。

◆1680円・A5判・298頁・冬花社・神奈川・2011/4刊・ISBN978-4-925236-68-3

『山と人を想い』 ●空 昌昭著



1人の山男の回想記である。山を通して山仲間を語り、また山仲間を通して山を語っている。著者の登山の原点はふるさと九州北部の山々、なかでも霊峰英彦山は朝夕仰いで育ったという。その信仰登山に関する豊かな記述は貴重なもの。当時秘境といわれたインド・カシミールのラダック地区への調査行(1974年)の記録は、正式の報告書を補完したものであるが、今日なお新鮮なも

のとして伝わってくる。鳥海山の乱開発の中止を訴え続けた池田昭二、拓父子とのぬくもりのある交流からは、著者自身の自然保護へのみなぎる情熱をも汲み取ることができる。各地の山への紀行、出会った山仲間との交流や出来が回顧され、鮮やかに綴られている。

◆1680円・A5判・270頁・随想舎・栃木・2011/4刊・ISBN978-4-88748-236-4

『すみれちゃん』 ●森 雅之著



ちひろちゃんの夢はネコを飼うこと。けれど、今住んでいるところではネコを飼えないので、いつか飼うネコの名前をいつも考えています。誕生日にお母さんが作ってくれたネコのぬいぐるみに「すみれちゃん」と名付けて、いつもいっしょ。ところがある日、友達とケンカしたあと、腹立ちまぎれに歩き回っていて、すみれちゃんを失くしたことに気づき……。

本書は1996年に日本漫画家協会賞優秀賞を受賞した著者の絵本。短いお話の中に親子愛、動物愛、友情などいろいろな思いが詰まっていて、ともすれば見失いがちな暖かい感情を思い出させてくれる。根強いファンを持つ著者の世界が絵本の中でも広がっている。

◆1470円・175mm×237mm・32頁・ピリケン出版・東京・2011/5刊・ISBN978-4-939029-52-3

『子どもはなぜ電車が好きなのか —鉄道好きの教育<鉄>学』 ●弘田陽介著



初めてわが子が発した言葉は「でんしゃー」であった…。本書はそんな実体験から生まれた。教えたわけでもないのに、息子はいつのまにか鉄道が大好きになっていた。そこでパパも鉄道に興味を向け、「子ども」と「鉄道」のつながりを、あらゆる方向から考察してみた。「なぜ子どもはこんなに鉄道が好きなのか」を解明しようとするなかで、見えてきたのは、子どもの発達と成長の物語

であった。彼は己れの成長の糧を、精神を広やかにする材料を選びとっていたのだ。本書の資料編「鉄道のおもちゃ」「ヨーロッパの子ども向け鉄道文化」「鉄道の絵本」も充実していてすばらしい。

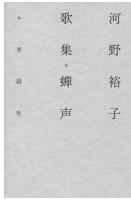
◆1890円・四六判・221頁・冬弓舎・京都・2011/2刊・ISBN978-4-925220-27-9

売行良好書

期間：2011年7月16日～8月15日

【出荷センター扱い】※税込み価格

- (1)『蝉声』2800円・青磁社 (2)『未来ちゃん』2100円・ナナロク社 (3)『もっと、遠くへ』1470円・学芸みらい社 (4)『赤いおおかみ』2415円・古今社 (5)『菜食主義者』2310円・クオン (6)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1365円・書籍情報社 (7)『荒れ地に花は咲く』1500円・アートヴィレッジ (8)『象の消えた動物園』2625円・編集工房ノア (9)『漬けもの読本』300円・ベターホーム出版局 (10)『昭和二十年八さいの日記』1365円・石風社 (11)『写真でわかる 磯の生き物図鑑』2940円・トンボ出版 (12)『中国情報ハンドブック 2011年版』3150円・蒼蒼社 (13)『死の同心円』1680円・長崎文献社



【三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書】※税込み価格

- (1)『酒とつまみ 14号』400円・酒とつまみ社 (2)『東京かわら版 8月号』420円・東京かわら版 (3)『寄席芸人写真名鑑』1680円・東京かわら版 (4)『昭和プロレスマガジン 24』1000円・昭和プロレス研究室 (5)『未来ちゃん』2100円・ナナロク社 (6)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1365円・書籍情報社 (7)『佐土原城』1680円・鉦脈社 (8)『甲斐小山田氏』3360円・岩田書院 (9)『象の消えた動物園』2625円・編集工房ノア (10)『改訂版 武蔵松山城主上田氏』1890円・まつやま書房

【ジュンク堂書店新宿店—センター扱い図書】※センター出荷データより/税込み価格

- (1)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1365円・書籍情報社 (2)『昭和プロレスマガジン 24』1000円・昭和プロレス研究室 (3)『HOT CHILI PAPER Vol. 65』1500円・エイチ・シー・ピー (4)『酒とつまみ 第14号』400円・酒とつまみ社 (5)『未来ちゃん』2100円・ナナロク社 (6)『32ページの量子力学入門』315円・暗黒通信団 (7)『ハッタ・コロロギ・キリギリス生態図鑑』2730円・北海道大学出版会 (8)『「琉球処分」を問う』980円・琉球新報社 (9)『体質と食物』368円・クリエー出版部 (10)『台湾旅行プロ・ガイドも気がつかなかった観光・ビジネス裏事情』1575円・イーフェニックス

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
本と出版流通のページ：<http://neil.chips.jp/>

トピックス — ★★

▼なでしこジャパン元キャプテンの手記

東日本大震災における福島第一原発事故と深刻な放射能漏れは、地味に売れ続けていた既刊の原発関連本を、突如スポットライトの真ん中に引き出しました。『**原発は地震に耐えられるか**』（原子力史料情報室刊 840円 2008/3発行）や『**老朽化する原発 - 技術を問う**』（同 1050円 2005/3発行）『**ほんとにだいじょうぶ？身近な放射線**』（同 525円 2006/3発行）等々。さらには長崎の被爆医師秋月辰一朗氏の著書『**体質と食物**』（クリエー出版刊 368円）『**死の同心円**』（長崎文献社刊 1680円）も。世の中の出来事によって、それまで目立つことなく細く長く売れてきた本が突如脚光を浴びる、というのはよくあることです。今回のなでしこジャパンのワールドカップ優勝という偉業によって、2年前に刊行された『**荒れ地に花は咲く**』（アートヴィレッジ刊池田浩美著 1500円）という、元なでしこジャパン・キャプテンによる手記が、突如注目されることになりました。新聞広告の影響も大きく、たくさんの注文を集めています。2009年に映画『おくりびと』が米国アカデミー賞外国語映画賞を受賞し、その原作とされる『**納棺夫日記**』（桂書房刊青木新門著 1575円）が、突然ものすごい勢いで売れはじめた時のことも思い出されました。

郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
 - ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
 - ◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。
- ★地方・小出版流通センター
FAX：03-3235-6182

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM ~ 8:00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

営業の
ごあんない

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

